

Reconsideration on the Wooden Saddle and the Iron Stirrup, Including the Materials related to the Keicho-era Mission to Europe (1613-1620):  
Exploring the relationship between the Bunroku Campaign (1592-1593)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-08-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 和博 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24115">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24115</a>

# 国宝「慶長遣欧使節関係資料」木製鞍・鉄製鐙再論

——文禄の役との関わりを探る——

佐々木 和 博

## 1 はじめに

拙著『慶長遣欧使節の考古学的研究』（佐々木2013）において、国宝「慶長遣欧使節関係資料」（以下、慶長資料と略記）の木製鞍と鉄製鐙の製作地域と制作年代を検討した結果、木製鞍については鞍橋の形態や前輪・後輪と居木の固定方法などから、また鉄製鐙については形態的特徴と銀象嵌の文様から、それぞれ中国明代の15世紀後半から17世紀中葉のものであるとした。しかも、これらは旧仙台藩切支丹所（以下、切支丹所と略記）に保管されていたものであることから、セットであると指摘した。さらに慶長遣欧使節（以下、慶長使節と略記）の経路や

慶長資料の野杓と四方手の検討結果を踏まえて、この鞍と鐙は慶長使節が将来したものではなく、支倉常長が伊達政宗に随伴した文禄の役（1592～1596）に関わって入手した可能性があると考えた（以下、前稿という）。

しかし、この鞍と鐙の製作地域と製作年代の根拠として提示した資料は不十分なものであった。そこで本稿ではそれらに関する資料を新に加え、再論を試みることにする。

## 2 木製鞍の観察と特徴（第1図）

### 1）観察

前稿で鞍Bとしたものである。素材は櫟と思われる。前輪高24.7cm，後輪高23.1cmで、前者



1. 全体 2. 上面 3. 正面 4. 背面 5. 側面

第1図 慶長資料の木製鞍

が後者よりも1.6cm高い。前輪中央部外側から後輪中央部外側までの長さは39.0cmである。前輪の最大幅は26.5cmで、その頂部中央は1.3cmほど凹み、両隅を円く作る。前輪の正面形態は弓束がやや凹むB字形弓（ダイアグラム・グループ1982，以下，弓形と略称）に類似する。内側に直径1cm弱の円孔が左右に分かれて4個ずつ穿たれている。洲浜は弧状ではなく鋸状である。後輪は緩やかな弧を描き、最大幅は38.1cmである。後輪にも同様の円孔が左右4個ずつ穿たれている。

居木は全長43.0cmで、両端を弧状に作る。その幅は前輪と接する部分で13.5cmである。居木には、それぞれ長方形の力革（鐙革）通穴が1個と直径1cm弱の円孔が26個、穿たれている。したがって孔の総数は52個となる<sup>(註1)</sup>。このうち鞍輪と接する部分には、それぞれ2個一對の孔が前四対、後四対、認められ、それが鞍輪の孔と対応することから、居木と鞍輪を紐で固定するためのものであることがわかる。このほかに2個一對の孔がそれぞれ五対、認められる。

## 2) 特徴

この鞍の特徴として、つぎの三点を挙げることができる。第一点は居木の幅が広く、前輪の前と後輪の後に居木が伸び、居木先が顕著に形成されていることである。第二点は前輪・後輪と居木との固定を紐で行っていることである。第三点は前輪頂部中央が緩やかに凹む弓形を呈していることである。

## 3 鉄製鐙の観察と特徴（第2図，第3図）

### 1) 観察

前稿で鐙Bとした一隻である。全高18.7cmの鑄造輪鐙で表面の錆化が著しい。輪は下膨れの楕円状を呈し、外寸長径は14.8cm、外寸短径は14.2cmである。輪の厚さは頂部では0.9cmであるが、底部に向かって徐々にその厚みを減じ、底部では0.6cmである。一方、輪の幅は頂部では1.6cmであるが、底部に向かってハ字状に徐々に広くなり、底部では頂部の3倍の4.8cmとな



第2図 慶長資料の鉄製鐙

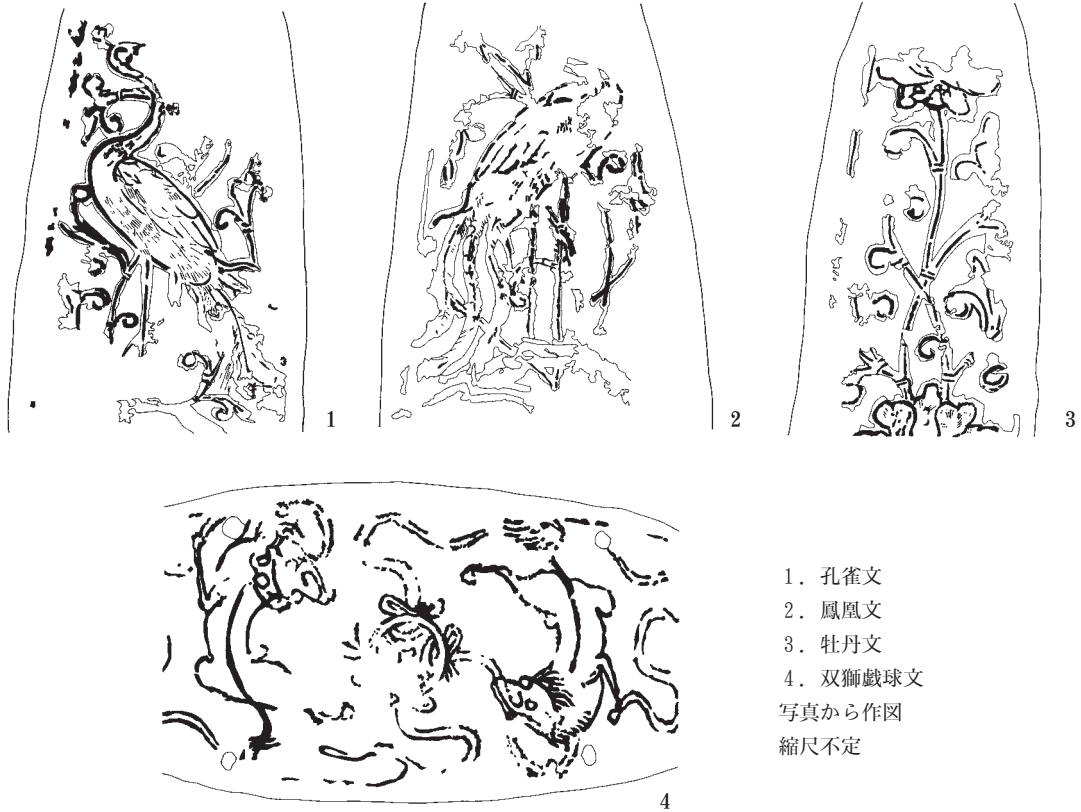
る。そのため踏込の範囲が不明瞭である。底部には真鍮製鉸が4個認められ、あるいはこれが踏込の範囲と関わるかもしれない。

輪の頂部中央には長径3.5cm、短径3.3cmの球がある。この球を縦に貫通する棒状金具があり、さらにこの金具と力革（鐙革）通し環（以下、環と略記）が連結されている。環はC字状とI字状の部品から成り、これを組み合わせてD字状に作り、I字状の部分を棒状金具と連結する。このような構造であるため、環は横に360度、縦に180度以上、回転する。

鐙のほぼ全面に銀象嵌が施されている。錆化が著しく文様が判然としない部分もあるが、輪の外面には頂部から側面部にかけて孔雀文（第3図1）・鳳凰文（第3図2）・牡丹文（第3図3）が、底面部に双獅戯球文（第3図4）が認められる。一方、内面の両側面部には雷文、底面部に獅子文が認められる。

### 2) 特徴

この鐙の特徴はつぎの三点である。第一点は輪の側面形が撥状で、頂部から底部に向かって徐々に幅を増すことである。第二点は輪頂部に球があり、それを縦に貫通する軸に連結した環があることである。第三点はほぼ全面に銀象嵌が施され、その中に双獅戯球文が確認できることである。



1. 孔雀文  
2. 鳳凰文  
3. 牡丹文  
4. 双獅戲球文  
写真から作図  
縮尺不定

第3図 慶長資料の鉄製鎧の外面に施された銀象嵌文様

#### 4 木製鞍の製作地域

この鞍が本来どこで製作され、使用されたものなのかを把握するためには、その特徴として挙げた三点について検討しなければならない。まず居木の幅が広く、居木先が顕著な鞍についてである。このような鞍は西ヨーロッパでは15世紀前半まで認められるが、それ以降は幅の狭い居木に変化し、居木先も形成されない。一方、トルコ以東のアジアでは継続して使用されている (LaRocca2006)。

つぎに前輪・後輪と居木を紐で固定する鞍は中国・モンゴル・チベットで認められる (LaRocca 2006)。しかし朝鮮・日本でも確認できるから、その範囲はさらに東に拡大する。

第三点の前輪頂部中央が緩やかに凹む弓形を呈する鞍は一般的にはあまり見られないもので

あるから、ここでは凹みの度合よりも凹んでいるという事実にもまず注視したい。劉永華は明代の「前鞍橋也不再は一貫の拱形、而是中間了一個豁口（前輪は一貫してアーチ形ではなく、中央部に切れ目を入れているものもある：筆者試訳）」とする (劉2002)。つまり劉はこの形態の前輪を明代の特徴と捉えているのである。

上記三点の特徴を検討した結果を踏まえれば、この鞍を中国製とすることが最も妥当であると考えられる。

#### 5 木製鞍の製作年代

##### 1) 方法

現状では中国製で前輪が弓形を呈する鞍の遺存例を確認できない<sup>(註2)</sup>。そこで次善の方法として、版画や肉筆画などに描かれた鞍の分析によって製作年代の把握を試みてみたい。

劉は前輪が弓形を呈する鞍を明代の特徴と捉えた。しかし、前稿で黄梓《鄭成功画像軸》（中国国家博物館所蔵）に同様の前輪を有する鞍が描かれていることから、清代初期までの存続を指摘した。年代の下限と同様に上限についても、資料を渉猟して検討することにする。

上述したように劉は、明代の前輪の形態にはアーチ形と弓形があることを指摘した。しかし絵画等には、これ以外の形態の前輪も客体的ではあるが確認できるから、これらも含めて分類し、1368年から1644年までの276年間存続した明朝を中心とする様相の把握に努めたい。

## 2) 前輪の分類 (第4図)

前輪上部の形態は大きく4類に分けられる。I類はアーチ形であるが、さらに明瞭な弧を描くもの (I a類) と僅かに弧状を呈するもの (I b類) に細分できる。

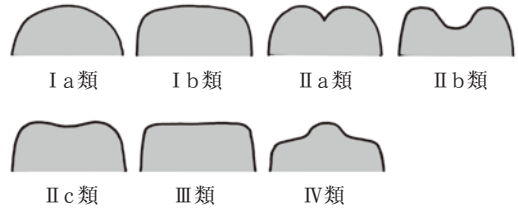
II類は弓形である。中央部の凹みの状態でさらに三つに細分できる。すなわちハート形に凹むもの (II a類)、U字状に凹むもの (II b類)、皿状に浅く凹むもの (II c類) である。

III類は平坦で鋸状を呈し、IV類は中央部が凸字状に盛り上がるものである。

## 3) 前輪II類の年代的な上限

劉はこの類を明代の特徴としたが、元代に遡る可能性がある。その資料は台北國立故宮博物院が所蔵する《刺繡九羊啓泰図軸》である。2014年に東京国立博物館で開催された特別展「台北 國立故宮博物院 神品至宝」図録の222頁にその全容が、223頁にクローズアップが、それぞれカラーで掲載されている。太子が乗る羊には前輪と鐙が明瞭に表現され、前輪はハート形に凹むII a類である。

この刺繡画は新年を祝う際に掲げる吉祥画の延長上にある絵画形式を有するもので、13~14世紀の元代 (小山2014) とされている。この資料と対幅と考えられるのがアメリカのメトロポリタン美術館が所蔵する《刺繡開泰圖》(所蔵番号1981.410) である。しかし同美術館では14~15世紀の明代早期とする<sup>(註3)</sup>。



第4図 前輪の形態分類

両者の年代観に相違があるため断定はできないが、元代に遡る可能性があり、降っても明代早期といえる。

## 4) 明朝における前輪の様相

### (1) 版画

輪郭が明瞭に表現される版画によって前輪の様相を見てみたい。明代は出版活動が盛んで、今回の調査で前輪の形態を確認できたタイトル (題名) は22を数える。しかし、その内の12タイトル<sup>(註4)</sup>の出版年は万暦年間 (1573~1619) とされ、その年代幅は46年間である。この年代幅では、後述する前輪形態の変遷を把握するための資料としては不適であるため、ここでは除外することにする。

出版年が明確な10タイトル (第1表 a・b, 第5図) を対象に前輪の形態分類をすると、I類とII類だけで、III類・IV類は確認できない。成化22 (1486) 年出版の『釋氏源流』では10点の版画で前輪形態の確認ができたが、そのうち7点がI類で、3点がII類であった。一方、万暦44 (1616) 年出版の『元曲選圖』では15点の版画で確認できたが、そのすべてがII類であった。この2書の間に出版された6書 (『醴泉縣志』~『新刊施会元匯刻士民捷用一雁横秋』) はI類とII類が拮抗している様相が窺える。なお天啓元 (1621) 年出版の『武備志』ではI b類が、崇禎元 (1628) 年出版の『玉茗堂批點明開運輯略武功名世英列傳』ではII c類が、それぞれ1点確認できた。

### (2) 肉筆画

ここでは騎馬像が比較的まとまって描かれている《明宣宗行樂図軸》(北京故宮博物院所蔵)、《倭寇図卷》(東京大学史料編纂所所蔵)、《明

第1表 a 版本にみる前輪の形態

版 本 名 / 出 版 年	前輪形態 (類別)					掲 載 書	頁
	I		II				
	a	b	a	b	c		
釋氏源流 / 成化22 (1486)	●					中國古代版畫叢刊二編 第二輯	39
	●						77
	●						79
	●						115
		●					427
	●						477
	●						751
					●		63
				●			75
				●			631
體泉縣志 / 嘉靖14 (1535)	●					中国版画史图录 (上)	204
新刊校正古本大字釋三國誌通俗演義 / 万曆19 (1591)						金陵古版畫	268
列仙全傳 / 万曆28 (1600)				●		中國古代版畫叢刊(三)	74
					●		266
重校紅拂記 / 万曆29 (1601)					●	中国版画史图录 (下)	655
古列女傳 / 万曆34 (1606)	●					中国版画史图录 (上)	115
新刊施会元匯刻士民捷用一雁橫秋 / 万曆39 (1611)	●					中国版画史图录 (上)	191
元曲選圖 / 万曆44 (1616)				●		中國古代版畫叢刊二編 第七輯	4
				●			6
				●			33
					●		40
					●		41
				●			42
				●			43
				●			61
					●		69
					●		71
				●			79
					●		148
				●			155
				●			167
				●			192
古今列女傳評林 / 万曆年間 (1573~1619)	●					中國古代版畫叢刊二編 第四輯	34
	●						88
	●						376
					●		263
閨範 / 万曆年間				●		中國古代版畫叢刊二編 第五輯	244
				●			249
				●			588
	●						658
				●			507

第1表b 版本にみる前輪の形態

版 本 名 / 出 版 年	前輪形態 (類別)					掲 載 書	頁
	I		II				
	a	b	a	b	c		
閨範 / 万暦年間 (1573~1619)			●			中國古代版畫叢刊二編 第五輯	629
					●		638
玉環記 / 万暦年間	●					金陵古版畫	21
新刻重訂出像附釋標註音釋音趙氏孤兒記 / 万暦年間	●						72
新編全像點板寶禹鈞全德記 / 万暦年間	●						137
					●		138
白免記 / 万暦年間					●		22
鵜新編出像南柯夢記 / 万暦年間					●		140
天書記 / 万暦年間					●		236
皇明開運輯略武功名英烈傳 / 万暦年間	●					中国版画史図録 (下)	526
義烈記 / 万暦年間					●		680
唐詩畫譜 / 万暦年間				●		中國古代版畫叢刊二編 第七輯	19
					●		85
				●			139
					●		279
詩餘畫譜 / 万暦年間			●				167
武備志 / 天啓元 (1621)					●	和刻本明清資料集 第4集	830
玉茗堂批點皇明開運輯略武功名世英烈傳 / 崇禎元 (1628)		●				中国版画史図録 (下)	526

人出警図》(台北國立故宮博物院所蔵)を中心に検討することにしたい<sup>(註5)</sup>。

《明宣宗行樂図軸》は宣宗宣德帝(在位1426~1435)の宮廷画家商喜の作品で、制作年代は15世紀中頃である。《倭寇図巻》には日本の年号「弘治四年」が記されている(須田2012)ことから、1558年以降の制作であることは明白であるが、馬雅貞は「嘉靖年間よりやや下った頃と考え」、つぎに豊臣秀吉による「朝鮮出兵」を契機として制作された可能性も指摘する(馬2013)。このことから制作年代は1570年代あるいは1600年前後と捉えていると理解できよう。

《明人出警図》(縦92.1cm, 長さ2601.3cm)は《明人入蹕図》(縦92.1cm, 長さ3003.6cm)と対になるもので、制作年代については那志良(Na1970)と林莉娜(林1993)は世宗嘉靖帝(在位1522~1566)の可能性が高いとしたが、朱鴻(朱2004)は神宗万暦帝による万暦11(1582)年2月の謁陵を描いたものとした。朱説は実証的研究に基づいて緻密に論が構成・展開されて

いることから、支持できる説である。

《明宣宗行樂図軸》には宣德帝を含む官人等26騎が列を成すように描かれている。このうち前輪の形態が確認できるのは19騎で、その内訳はIb類(第6図1)が2騎、IIc類(第6図2)が1騎、III類(第6図3)が16騎である。《倭寇図巻》には明軍の武官・文官等14騎が描かれ、そのうちの5騎で前輪が確認できる。Ia類(第7図1)・Ib類(第7図2)・III類(第7図3)が各1騎で、2騎は類別が難しい。《明人出警図》では653騎が描かれ、283騎で前輪が確認できた。その内訳はI類(第8図1)が16騎(5.7%)、II類(第8図2)が186騎(65.7%)、類別困難が81騎(28.6%)であった<sup>(註6)</sup>。この他に馬具を着装している人が乗っていない馬8頭が描かれており、その内の前輪が確認できる5頭すべてがII類(第8図3)であった。

### (3) 変遷

十分な数とはいえないが版画と肉筆画を資料として前輪の形態に注目して見てみた。その結



1『釋氏源流』(79頁) 2『禮泉縣志』(204頁) 3『古列女傳』(115頁) 4『新刊施会元匯刻士民捷用一雁橫秋』(191頁) 5『釋氏源流』(427頁) 6『釋氏源流』(63頁) 7『釋氏源流』(75頁) 8『列仙全傳』(74頁) 9『元曲選圖』(42頁) 10『列仙全傳』(266頁) 11『重校紅拂記』(655頁) 12『元曲選圖』(71頁)  
Ia類: 1~4 Ib類: 5 IIa類: 6・7 IIb類: 8・9 IIc類: 10~12

第5図 出版年代が明確な版画にみえる前輪の形態





1. Ib類



2. IIc類



3. III類

第6図 《明宣宗行楽図軸》に描かれた前輪



1. Ia類



2. Ib類



3. III類

第7図 《倭寇図巻》に描かれた鞍の前輪



1. I類



2. II類



3. II類

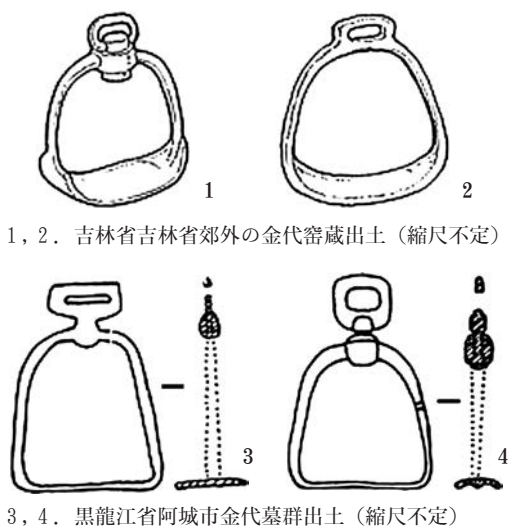
第8図 《明人出警図》に描かれた鞍の前輪

果、Ⅱ類は15世紀中頃に確認されるものの、長く客体的であったが、16世紀末～17世紀初期にはⅠ類に伍するあるいは凌駕する存在となったと理解できそうである。《明人出警図》や『元曲選圖』でⅡ類の存在が顕著なことが、その大きな根拠となる。

## 6 鉄製鐙の製作地域

製作地域を把握するために、特徴として既に指摘した三点を確認しておきたい。すなわち①輪の側面形態が撥状であること、②輪頂部に球があり、それを貫通する軸に連結した鑲があること、③ほぼ全面に銀象嵌で双獅戯球文等を施していることである。

まず②について見てみよう。この構造は鑲が左右・前後に動くことを示し、頂部の球は軸を通すための補強の役割を持つものと考えられる。劉は金代(1115～1234)の馬具を解説する中で吉林省吉林市郊の金代窖藏出土の第9図1・2を提示して「旋轉的吊帶環是一種新的設計，在以前的實物中還沒有出現過（回転する鑲は新しいデザインで、これ以前には出現していない：筆者試訳）」とする(劉2002)。輪頂部は球ではなく円筒状ではあるが、「軸を通すための補強」ということでは慶長資料の鉄製鐙と同一



第9図 金代の鐙



第10図 《明宣宗射獵圖軸》に描かれた鐙

じである。

この形態の鐙が中国東北部で金代に出現したとの劉の指摘は重要である。これを裏付けるものとして、黒龍江省阿城市の金代墓群から出土した鉄製鐙がある。複数型式の鐙が共存するが、その中に鑲が「任意旋轉」するものがある(閻1990, 第9図3)が、掲載図から判断して第9図4も同類であろう。ただ、掲載図から鑲は左右に回転することはわかるが、前後に動くかどうかは不明である。

つぎに③の銀象嵌による施文について見てみよう。輪の内外面および球に象嵌が施されているが、錆化が著しく、現状ではその全容把握が困難である。しかし、確認できる部分を丁寧に観察すると輪外面の側面部に孔雀文(第3図1)・鳳凰文(第3図2)・牡丹文(第3図3)、輪内面の側面部に雷文・底面部に獅子文、輪外面の底部には双獅戯球文(第3図4)が施されていることが判明した。これらの文様はいずれも中国との深い関わりを示すものと理解できる。

さらに①の輪の側面形が撥状であることについては金代から存在していることが確認できる(劉2002, 第9図2)。同様の側面形をもつ鐙は《明宣宗射獵圖軸》(北京故宮博物院所蔵)に描かれている(第10図)。しかし、正面形が楕円状ではない点で慶長資料の鉄製鐙とは異なる。

## 7 鉄製鎧の年代

### 1) 双獅戯球文

年代を把握するための指標と考えられるのが双獅戯球文である。これは二頭の獅子が繡球を対称点にして配置される文様である。管見で最も遡るものは、景德鎮御器遺跡出土の《青花双獅子戯球盤》で、その年代は成化期（1465～1487）の後期とされている（陳2017）。

16世紀には多くの資料が見られる。磁器では中国国家博物館所蔵の正徳期（1506～1521）に位置づけられる《青花双獅子戯球紋鼓式坐墩》（第11図1）<sup>（註8）</sup>、イラン・バスタン博物館所蔵の

16世紀中葉とされる《染付双獅子文皿》（第11図2、三杉・柏原1989）、リスボンのサントス宮殿の「磁器の間」の16世紀中葉～末葉の碗皿類（デロッシュ1999、第11図3）などを挙げる事ができる。彫刻では明十三陵の石牌坊（1540年造立）の柱基部のレリーフ（第11図4）がある。

17世紀の例として1663年に造立された清東陵石牌坊の基部のレリーフを挙げることができるが、明十三陵の石牌坊と様式が酷似していることから、後者を模倣・継承したものと考えられる。

このように双獅戯球文は15世紀末葉～18世紀中葉に見られるが、その盛行期は16世紀とすることができよう。



1. 中国国家博物館所蔵の青花鼓式坐墩



3. サントス宮殿「磁器の間」中央に双獅戯球文皿



2. バスタン博物館所蔵の染付皿の文様



4. 明十三陵石牌坊のレリーフ



1. 撥状の輪 2. 短冊状の輪 3. 逆Y字状の輪 1～3. 《明人出警図》 4. 《明人入蹕図》 5. 宝寧寺水陸画  
第12図 《明人出警入蹕図》と宝寧寺水陸画に描かれた鐙



1, 2. 年代不明 3. 明代

第13図 逆Y字状の輪を有する鐙

## 2) 撥状の輪と鐙との年代的な整合性

双獅戯球文は15世紀末葉には存在し、16世紀を中心として盛行した文様であった。そこで慶長資料の鉄製鐙の特徴として挙げた①撥状の輪と②鐙が、この年代幅の中で確認できるか否かを検討することにしたい。

まず輪の側面形が撥状を呈する鐙について見てみたい。遺憾ながら遺存例を提示できないが、絵画資料の中に見出すことができる。《明宣宗射獵図軸》に描かれている鐙（第10図）の輪の側面形は撥状で、輪頂部から下部に向けてその幅を漸増させている。《明人出警図》では鐙が描き分けられている。すなわち輪が撥状のもの（第12図1）、輪が短冊状のもの（第12図2）、輪が棒状で逆Y字状のもの（第12図3）である。この作品は神宗万曆帝による万曆11（1582）年2月の謁陵を描いたものと考えられるから、16世紀末葉に撥状の輪を有する鐙が存在



内蒙古成吉思汗陵出土

第14図 元代の逆Y字形の輪を有する鐙

したことがわかる。

つぎに回転する鐙について見てみたい。これも年代が特定できる遺存例を提示できないが、絵画の中にその可能性を見出すことができる。山西省に所在する宝寧寺（1460年創建）には139幅の水陸画があり、そのすべてが明代に属するとされている（呉1988）。その中の1幅に

描かれている鐙は、力革通し部と輪頂部を半球状に補強して棒状のもので連結している（第12図5）。《明人入蹕図》には輪頂部に球状のものが描かれている鐙がある（第12図4）。

ところで年代不明ではあるが、慶長資料の鉄製鐙と同様に輪頂部に球があり回転する鐙を有する鐙があり、その中には輪が逆Y字状のものもある（第13図1・2）<sup>(註9)</sup>。逆Y字状の輪を有する鐙は、管見では遅くとも元代から認められる（劉2002，第14図）。明代に入ると遺存例（王2007，第13図3）のほかに、肉筆画や版画でも数多く確認できる<sup>(註10)</sup>。なお、このタイプの鐙は清代にも認められる<sup>(註11)</sup>。

以上の検討の結果、側面形が撥状を呈する輪と回転する鐙が明代に存在することは確認できたが、この特徴を合わせ持つ鐙の存在は確認できなかった。この点については今後の課題としたい。

## 8 木製鞍と鉄製鐙の関係

木製鞍は、前輪頂部中央が僅かに凹む弓形を呈していることから、中国製でその年代は16世紀末～17世紀初期と考えた。一方、鉄製鐙は双獅戯球文で銀象嵌されていることから、その年代を16世紀と考えた。また、この鐙は輪の側面形が撥状で、その頂部に球を作りそこに回転す

る鐙を取り付けているという特徴を有する。この二点については明代の鐙にも認められることであるから、双獅戯球文に拠る年代観と矛盾することはない。

木製鞍と鉄製鐙の製作地域と製作年代を検討した結果、それらは重なり合うことが明らかとなった。このことから、これらを別々の馬具として捉え、それぞれ入手時期は異なるが、たまたま同一箇所、すなわち切支丹所に保管されたものとするのは難しい。むしろ製作地域と製作年代が重なることに注目するならば、この鞍と鐙はセットであると理解するほうが合理的で無理がない。

## 9 慶長使節と木製鞍・鉄製鐙の関係

### 1) 経路から見る入手地とその可能性の有無

慶長使節は1613年10月28日に仙台領牡鹿郡月浦を出帆し、1620年9月20（22）日に仙台に帰着した（第2表）。約7年にわたる長途の旅で中国製の木製鞍と鉄製鐙を入手したとするならば、1618年6月から1620年7（8）月までの2年余り滞在したマニラが最も可能性が高い。当時、中国船が広東・漳州・福州からマニラに來航し、「数えあげたらきりが無いし、いくら紙数を費やしても足りないくらい」の商品を運んできていた（モルガ1609，神吉・箭内訳1966）

第2表 慶長使節の経路（仙台市史編さん委員会編『仙台市史』特別編8により作成）

西 暦	事 項
1613年10月28日	サン・ファン・パウティスタ号，仙台領月浦をヌエバ・エスパーニャに向けて出帆
1614年1月28日	サン・ファン・パウティスタ号，アカブルコに到着（1月25，29日とする記録もあり）
1614年6月10日	メキシコ湾ベラクルスをスペイン船でスペインに向けて出帆
1614年10月21日頃	セビリヤに到着
1615年1月30日	スペイン国王フェリペ3世に謁見
1615年10月25日	ローマに到着し，パウロ5世に非公式に謁見
1616年1月7日	ローマを出発
1617年7月4日	セビリヤを出発
1618年4月2日	サン・ファン・パウティスタ号，アカブルコを出帆し，マニラに向かう
1618年8月10日頃	マニラ湾口のカビテに到着
1620年8月頃	マニラを出帆して長崎に到着
1620年9月20日	仙台に帰着（22日とする記録もあり）

第3表 中国からマニラへの船載商品

繊維・染織類	生糸, 生絹, ビロード, 錦織, 緞子, 縐子, タフエタン, ゴルゴラン織, ピコテ織, リンネル, 白木綿, 細い糸, カンガン (衣服の一種), 覆い布
香料類	麝香, 安息香
宝飾類	象牙, 真珠, ルビー, サファイア, 水晶, ビーズ玉, 数珠繋ぎの紅玉
食器・容器類	銅製食器, 鋳鉄製食器, 鍋, 釜, 陶器
寝具類	天蓋, 寝台掛け, 寝台カーテン, ベッド
家具・調度類	テーブルクロス (緞子・ゴルゴラン織), クッション, 絨毯, 手鏡, 小箱, 事務机, テーブル, 椅子, 長椅子
原料	鉄板, 錫, 鉛, 硝石, 火薬
食品・食料	小麦粉, 砂糖漬けオレンジ, 砂糖漬け桃, 干柿, オレンジ, 栗, 胡桃, 梨, 肉豆蔻, 生姜, 塩漬け豚肉, 乾肉, 鶏
家畜・ペット	水牛, 鴛鳥, 馬, 騾馬, 小鳥
その他	釘, 針, 絨毯にビーズや真珠をあしらった馬具

からである。モルガが記載している中国からマニラへの船載商品は第3表のとおりであるが、絨毯製の馬具の記載はあるものの鞍や鐙の記載はない。しかし、馬の船載が見られるから、それと共に鞍や鐙を輸出していた可能性も考えられる。

仮に中国製の鞍や鐙がマニラに輸出されていたとするならば、それはマニラ在住の中国人を主な対象としたものであろう。鞍や鐙などの馬具の形態はヨーロッパやアジアで異なるばかりでなく、アジアの中でもインド・中国・朝鮮・日本など、地域的な特徴が見られるからである。17世紀初頭、マニラは2万の中国人が居住する港市であった(菅谷2006)。マニラのスペイン植民地政府は中国人を指定居住区「パリアン」に隔離・収容し管理していた。

慶長使節がマニラで木製鞍と鉄製鐙を入手したとすれば、マニラ在住の中国人向けの商品として輸出されたものを入手したということになる。しかし、マニラにおける慶長使節は、マニラ在住の中国人とではなくスペイン植民地政府との強い関わりをもって2年余を過ごしていた。このことを物語るように慶長資料に含まれる中国製(系)の資料—祭服(カズラ)・壁掛・ロザリオの聖母像—のいずれにもヨーロッパあるいはキリスト教の要素が認められる。これに対して木製鞍と鉄製鐙は中国製ではあるが、そ

こにヨーロッパやキリスト教の要素は全く認められないのである。

マニラにおける中国人と植民地政府との関係、慶長使節と同政府との関係、慶長資料中の中国製(系)資料の特徴を総合すると、慶長使節が木製鞍と鉄製鐙をマニラで入手した可能性は低いと見るのが穏当であろう。

## 2) 藩政期における木製鞍と鉄製鐙の保管場所

慶長資料47点は一括して国宝に指定され、現在、仙台市博物館が所蔵している。しかし、藩政期における慶長資料は二つの系統に分かれて保管されていた。一つは伊達家が直接保管していたもので、《ローマ教皇パウロ五世像》・短剣2口がそれに該当する。これら3点を除いた44点は切支丹所に預物(没収品)として保管されていたものである。

このことについては、すでに大槻文彦が指摘している(大槻1912)。《ローマ教皇パウロ五世像》・短剣2振<sup>(註12)</sup>は「政宗卿へノ贈品」であり、切支丹所保管の資料は「支倉六右衛門常長ガ、元和年中、歐洲ヨリ齋シ歸リシ器具ニテ、其私有品ナリシニ、常長ガ子二世六右衛門常頼ガ、寛永十七年、切支丹宗門ナリトテ嫌疑ヲ受ケ、切腹ヲ命ゼラレ、家亡ビシ時、其所有品、藩ニ没収セラレテ、乃チ、切支丹所ニ存セシモノ、如シ」とする。

44点の中には支倉常長宛の《ローマ市公民権証書》と《支倉常長像》があることに加え、筆者による馬具・祭服(カズラ)・プラケット(メダイ) 残欠の年代と系譜の検討(佐々木2013, 2016, 2017), さらには《ロザリオの聖母像》の研究成果(神吉1989)等によって、大槻のようにそのすべてを欧州からの将来品で支倉常長の私有品と断定することはできないが、支倉常長と関わりが深い資料群と理解することはできよう<sup>(註13)</sup>。

### 3) 切支丹所保管の非将来品

44点の切支丹所保管資料の中に非将来品とすべきものがある。それは野沓(2点1具)と四方手<sup>(註14)</sup>(4点1具)である。野沓は切付の下縁に取り付ける馬具の一つで、鞍橋から垂下した力革(鎧革)が切付に当たるのを防ぐためのものである。そのため「力革ずり」ともいわれる。慶長資料の野沓は前端部を短く上向きに屈曲させた銅製で、文様等の装飾は全く見られない。

四方手は鞍橋の前輪と後輪の四方手通し孔に通した環状の紐とその付属具のことで、胸懸と尻懸を搦め、鞍を固定するための馬具の一つである。四方手には絹のままのもの他に管金物等を加えた管四方手・鏡四方手・饅頭四方手・打貫(曲輪)四方手がある(鈴木1985)。慶長資料の四方手は銅製黒漆塗りの打貫(曲輪)四方手である。

野沓は、日本では13世紀末から確認できるが、慶長資料の野沓のように前端部が屈曲する形態になるのは16世紀前半以降である。しかし、中国・朝鮮・インド・ヨーロッパでは野沓に該当する馬具は確認できなかった。これは鞍橋に力革を取り付ける方法が日本とは異なることに起因するものと考えられる。一方、四方手と同様の機能を有する馬具は中国・朝鮮・インド・ヨーロッパでも認められるが、同形態の馬具は確認できなかった。これは胸懸・尻懸と鞍橋の固定方法の差異を反映しているものと考えられる。

このように見てくると、野沓と四方手は日本

以外では見られない独特の形態を有する馬具といえる。しかも慶長資料の野沓と四方手には文様等の装飾も全く施されていないことから、通有の日本製品と判断できる。もし、この野沓と四方手を慶長使節による将来品であるとするならば、使節が日本から携行し、日本に持ち帰ったと解釈するのが最も穏当である。しかし、これらは鞍橋・馬銜・鐙等の「主役」的な馬具とは異なり「脇役」的なものであり、慶長資料に日本製の「主役」の馬具が確認できない中で、何故に「脇役」だけを携行するのか、その理由を見出すことが難しい。

この野沓と四方手は切支丹所保管資料群に含まれていることから、支倉常長に関わりの深い没収品と考えることができる。没収に際して、藩の担当役人がキリシタン関係品あるいは慶長使節に関わる将来品であるかどうかを一点一点確認しながら、その作業を行ったとは考え難い。むしろ、キリシタン関係品や将来品およびその周囲・近辺にある品々をも含めて一括して没収したと解するのが、没収時の現実に近いのではないだろうか。このように想定するならば、慶長使節の将来品ではない品々もその近辺・周囲にあったために没収されてしまったと考えられる。野沓と四方手は、このような没収作業の中で没収品の中に含まれることになったのであろう。

慶長資料の野沓と四方手は、切支丹所保管の43点は慶長使節と直接的に関係を有するものという旧来の見解を否定する資料として重要である。野沓と四方手の存在によって、慶長使節という軛から解放され、同使節以外の支倉常長との関係ということに視野を広げて切支丹所保管資料を考えることが可能となった。

## 10 木製鞍・鉄製鐙の入手時期と入手契機

### 1) 支倉常長の海外渡航

木製鞍と鉄製鐙は中国明代のもので、セットと考えられる。このことから、支倉常長がこれらを入手した場所としては、日本国内よりもむしろ海外の可能性が高いということになる。そ

第4表 文禄2（1593）年における朝鮮での伊達政宗の動向

（太田2005，図1付表を一部改変）

月	日	動 向
3月	20日	肥前名護屋を出航
	末日	対馬に到着
4月	13日	釜山に到着
	18日	釜山を出立
	21日	蔚山で戦鬪に参加，城郭を普請
5月	2日	この頃までに梁山に陣を移す
	17日	この頃までに金海に着陣
6月	14日	金海・昌原間に野陣
	19日	宜寧に到着
	22日	晋州城攻撃に参加（～29）
7月	中旬頃	倭城普請に参加（～9月上旬）
9月	11日	釜山を出航
	18日	肥前名護屋に到着

ここで、まず慶長使節として2年程滞在したマニラでの入手を想定して検討を加えたが、上述したように、その可能性は低いという結果に至った。

ところで、支倉常長の海外渡航は慶長使節の時が最初ではなかった。実は、その20年も前にそれを経験していたのである。渡航先は朝鮮で、文禄の役に出陣するためであった。文禄2（1593）年4月から9月まで、伊達政宗は豊臣

秀吉の命を受けて朝鮮に渡った。その時、支倉常長も「御手明衆廿人」<sup>(註15)</sup>の一人として伊達政宗に随伴したのである（五野井2003）。

伊達政宗が渡海した時、文禄の役は大きな転換期にあった。文禄2年1月、日本軍は明国軍（3万）と朝鮮国軍（8千）に平壤を攻囲・奪還され、漢城に退いた。この頃から講和交渉が始まり、4月後半に日本軍は漢城を撤退した。日本軍は半島南東海岸に後退し、その地域を恒久的に支配するために各所で倭城の築城を行った。

朝鮮における伊達政宗の動向は第4表のとおりである。伊達政宗軍と明国軍の直接的な戦鬪は確認できないが、明国軍は南下し日本軍に迫りつつあった。6月の晋州城攻略時には、明国軍は慶尚道・全羅道に3万の兵を配し、さらに南下する動きも見せた（参謀本部編1924）。

このように、支倉常長と明とが最も接近した関係にあったのが文禄の役といえる。このことから、慶長資料の木製鞍と鉄製鎧を入手する契機として文禄の役を考えることはできないであろうか。その可能性を探るために、つぎに木製鞍・鉄製鎧と明国軍の馬具を含む軍器との関係の有無を検討することにしたい。

第5表 《平壤城攻防図屏風》の騎馬数と鞍前輪・鎧輪側面の形態（辛・仲尾1996により作成）

	騎馬数	鞍の前輪形態					鎧の輪の側面形態			
		I類	II類	IV類	不明	表現なし	撥状	短冊状	棒状	表現なし
第1扇	5	3	1	0	0	1	1	0	1	3
第2扇	4	2	1	0	0	1	1	2	1	0
第3扇	4	1	1	2	0	0	1	1	1	1
第4扇	7	1	2	1	0	3	2	3	1	1
第5扇	6	0	4	0	0	2	2	2	0	2
第6扇	6	0	2	0	3	1	3	2	0	1
第7扇	4	0	4	0	0	0	1	3	0	0
第8扇	4	1	2	0	0	1	1	3	0	0
第9扇	4	0	2	0	0	2	1	3	0	0
第10扇	2	0	1	0	1	0	0	2	0	0
合計	46	8	20	3	4	11	13	21	4	8



## 2) 明国軍の軍器と木製鞍・鉄製鐙との関係

明国軍が使用した軍器を知るための数少ない絵画資料として十曲一隻の《平壤城攻防図屏風》(403.2cm×97.3cm, 韓国国立中央博物館所蔵)を挙げることができる<sup>(註16)</sup>。この屏風は文禄2年1月、平壤城に拠る小西行長等の日本軍を李如松が率いる明国軍が攻撃している様子を中心に描いたもので、これまで朝鮮の役に関する絵画資料としてたびたび取り上げられてきた。しかし、制作年代は近現代に降るものではないと思われるものの、明確ではないことが惜しまれる。

年代不詳ではあるが、明国軍を絵画から知りえる数少ない資料であるので、ここでは特に鞍と鐙に注目して見ることにしたい。騎馬数および前輪形態・鐙輪側面形態を扇別にまとめたのが第5表である<sup>(註17)</sup>。騎馬数は46騎で、その内、前輪が描かれているものが35騎で、さらにその形態を判別できるものが31騎である。31騎の内、20騎がⅡ類(第15図2)で、これにⅠ類(第15図1)8騎、Ⅳ類(第15図3)3騎が続く。このことから、前輪の形態はⅡ類が主流であることがわかる。《明人出警図》や『元曲選圖』も同様にⅡ類が主流であるから、この屏風の制作年代が16世紀末～17世紀初期だとしても矛盾は生じない。

慶長資料の木製鞍の特徴の一つは前輪頂部中央が僅かに凹む弓形(Ⅱc類)であることである。《平壤城攻防図屏風》に描かれた前輪もⅡ類であることから、両者には共通形態の前輪が認められることになる。

鐙は側面から描かれていることから、輪の側面形態によって、撥状・短冊状・棒状に分類した。撥状の輪は頂部から下部(踏込)に向かって、その幅を漸増するものである。短冊状の輪は頂部と下部が同じ幅のもので、棒状の輪は幅が狭く、带状にならないものである。

鐙の輪の側面を形態別に集計すると撥状13、短冊状21、棒状4となる。短冊状が半数を超え、この形態が主流であることがわかるが、撥状も3分の1以上あり、等閑視できない形態である。ただ踏込は共通して輪よりも明らかに広く表現されている。したがって輪と踏込を含めた鐙側面形は概ね逆T字状となる。

慶長資料の鉄製鐙は輪の側面形態が撥状で、《平壤城攻防図屏風》に描かれた鐙と共通点は見出せるものの、踏込部の形態は全く異なる。この点で鞍と比べれば両者の鐙の共通性は低いと見なければならぬ。

慶長資料の鉄製鐙を明代とする主な根拠としたのが銀象嵌で表現された双獅戯球文であった。そこで、この文様を手掛かりに明国軍の軍



1. 前輪：Ⅰ類，輪：短冊状(第2扇) 2. 前輪：Ⅱ類，輪：撥状(第5扇) 3. 前輪：Ⅳ類，輪：棒状(第3扇)

第15図 《平壤城攻防図屏風》に描かれた明国軍の前輪と鐙



第16図 慶長の役の際に使用された明国軍軍器の唐太鼓と鼓面に描かれた双獅戯球文

器との関係を探ってみることにしたい。

松浦史料博物館（平戸市）には朝鮮の役に關わる明国軍・朝鮮国軍の軍器がまとめて収蔵されている。その中に4点の唐太鼓があり、松浦家の記録『家世伝』卷之二十五「法印公傳四」<sup>(註18)</sup>によれば慶長3（1598）年11月18日の露梁津海戦で得たものだという。鼓面には麒麟（第16図3）・孔雀・牡丹・獅子などの吉祥文が鮮やかな色で表現されている（佐賀県立名護屋博物館編2007）。これらの中で最も注目されるのが獅子文を描いているものである。この獅子文は2頭の獅子が繡球を中心に点対称に描かれており、双獅戯球文の範疇で理解することができる（第16図1・3・4）。

松浦史料博物館所蔵の明国軍軍器・唐太鼓の

一つに双獅戯球文が描かれたものがあり、明国軍がこの文様を軍器に用いていることが明らかとなった。この唐太鼓は慶長の役で得たものとされているが、年代的に近接していることから文禄の役でも明国軍がこの文様を軍器に用いていたと考えることは妥当であろう。

慶長資料の木製鞍・鉄製鐙と明国軍軍器との関係を検討した結果、鞍においては前輪頂部中央が凹む弓形であることが共通し、また鐙においては銀象嵌で描かれた文様と明国軍の唐太鼓鼓面に描かれた文様がともに双獅戯球文であることが明らかとなった。このことから、慶長資料の木製鞍・鉄製鐙と明国軍軍器とは前輪形態と双獅戯球文で関係を有しているといえる。

## 11 まとめと課題

切支丹所に保管されていた慶長資料は、没収品で支倉常長と関わりが深いものである。したがって、ここに含まれる木製鞍・鉄製鐙も支倉常長との関係で捉えることができる。しかし、ここからさらに踏込んで文部科学省（文化庁）の慶長資料に関する解説のように、そのすべてを支倉常長が大使として率いた慶長使節の将来品とする見解が一般的である。ここには支倉常長＝慶長使節＝慶長資料という図式が明瞭に見える。

慶長資料の中に、上記の図式では合理的な説明が難しい資料—野杳と四方手—がある。この資料は日本固有の形態を有する馬具で、しかも通用のものであることから、慶長使節の将来品と断ずることは難しい。したがって、慶長資料のすべてを短絡的に慶長使節の将来品とすることはできないことになる。換言すれば、切支丹所保管の慶長資料は、支倉常長に深く関わる資料ではあるが、そのすべてを慶長使節に関わるものとは言い切れないということである。

切支丹所保管の慶長資料に対する上記のような基本的な認識の下に、木製鞍と鉄製鐙の製作地域と製作年代を検討した。その結果、形態的な特徴や施されている文様から中国明代のもので、しかもセットであると判断した。

この鞍と鐙が慶長資料に含まれていることから、まず慶長使節の将来品の可能性を検討した。慶長使節の経路を見ると、入手地として最も可能性が高いのはマニラである。しかし同地における中国からの輸入品に鞍・鐙の記載がないこと、慶長資料の中国製（系）資料—祭服（カズラ）・壁掛・《ロザリオの聖母像》—にはヨーロッパあるいはキリスト教の要素が認められるものの、この鞍・鐙にはそれが認められないことなどから、同地での入手の可能性は低いと判断した。

つぎに、この鞍と鐙が中国明代であることから、支倉常長と明との関係を考えた。そこで注目したのが文禄の役である。支倉常長は伊達政

宗に随伴して文禄の役に出陣しているからである。さらに明国軍軍器との関係を検討した結果、鞍では前輪頂部中央が凹む弓形を呈すること、鐙に施された双獅戯球文が明国軍軍器の唐太鼓鼓面に認められること掴んだ。このことから、この鞍と鐙は文禄の役を契機として入手した可能性があると考えたのである。

しかし、今後の課題として、少なくともつぎの二点が挙げられる。本稿では明代を中心とする絵画資料を多用したが、さらに確実性や客観性を担保するためには類似する鞍・鐙の遺品・遺物を収集する必要がある。つぎに、文禄の役で日本にもたらされた明国軍軍器の様相を史料や遺品を渉獵して明らかにすることである。代表的な明国軍軍器等としては唐太鼓を含む松浦史料博物館所蔵資料があり、その他に陣羽織と銅鑼がある（佐賀県立名古屋城博物館2007）。しかし、いずれも慶長の役に関わるものであり、文禄の役のものではない。

さらに、この検討を通じて明らかにされた慶長資料の歴史的評価の再検討という大きな課題がある。これは慶長資料＝慶長使節将来品という従来の歴史的評価の見直しを迫ることに繋がることから、慶長資料の根幹に関わる課題であるといえる。

本稿を執筆するに当たり、つぎの方々および機関に教示・協力等をいただいた。記して感謝の意を表したい（敬称略）。

赤堀和、石橋宏、忽那敬三、佐川正敏、楊玉華、仙台市博物館、松浦史料博物館

## 註

1. 前稿では「18個（計36個）」と記したが、誤りであった。26個（計52個）に訂正する。
2. 中国製ではないが、ミャンマーの鞍をイギリス（リーズ）の王立武器武具博物館（Royal Armouries Museum）で実見したことがある。18世紀とされ、前輪が非常に高く、後輪は低い、ともに透かしのある鉄製である。居木は木製で、幅が広く、居木先は顕著で、端部を円く仕上げている。ただ中国との関係は不明

- である。
3. つぎのアドレスにアクセスすると閲覧できる。  
<https://www.metmuseum.org/art/collection/search#!?q=1981.410>
  4. 12タイトルはつぎのとおりである。『古今列女傳評林』『閩範』『玉環記』『新刻重訂出像附釋標註音釋音趙氏孤兒記』『新編全像點板寶禹鈞全德記』『白免記』『鐫新編出像南柯夢記』『天書記』『皇明開運輯略武功名英烈傳』『義烈記』『唐詩畫譜』『詩餘畫譜』
  5. 明代で騎馬が数多く描かれている作品に《平番図巻》(中国国家博物館所蔵)がある。これは万暦3(1575)年の甘肅洮州十八番族の平定を描いたものとされる。しかし鞍・鎧等の馬具の形態を判別できる程精細な画像を入手できなかったため、対象から除外せざるをえなかった。
  6. 全画面を掲載している書籍がないので、約3分の1に縮小した複製『明人畫出警圖』を資料として用いた。そのため、前輪形態の細部までの確認はできなかった。なお、これは台北故宮博物院のミュージアムショップで入手できる。
  7. つぎのアドレスにアクセスすると閲覧できる。  
<http://www.chnmuseum.cn/tabid/212/Default.aspx?AntiqueLanguageID=6126>
  8. 繡毬と戯れる獅子は2頭に限らない。1～4頭とその数に幅がある。獅子戯球文あるいは獅子滾繡毬文といわれ、日本では玉取獅子文という。16世紀に盛行する文様とされる(三杉・榊原1989)。管見で年代的に最も遡る作品は14世紀のもので、繡球を対称点とはしないが2頭の獅子を描いている景德鎮窯製の《青花玉取獅子八角瓶》(河北省博物館所蔵)である(佐藤1981)。
  9. 鎧コレクターの赤堀和氏所蔵品の中にある。
  10. 肉筆画では《明宣德帝馬上図軸》(台北國立故宮博物院所蔵)・《抗倭図巻》(中国国家博物館所蔵)などで確認できるほか、《明人出警入蹕圖》には数多く描かれている。版画では『元曲選圖』の「薦福碑」(三封書謁揚州牧, 第5図12)・『三才圖巻』(1609年出版)の「馬上諸器圖」・『玉茗堂批点皇明開運輯略武功名世英烈傳』(1628年出版)に見える。
  11. 王度『御馬金鞍—王度歴代馬鞍馬具珍藏展—』には、このタイプの清代の鎧3対(HS-047, HS-045, HS-039)が掲載されている。
  12. この他に「石柄劍長五寸四分」の小刀1口があった(菊田1933)。しかし、現在は所在不明である。
  13. 切支丹所保管の慶長資料のうち、個別に系譜や年代の検討が行われていない資料が半数弱ある。した

- がって、現状ではそのすべてが支倉常長に関わる資料とは言い切れない。
14. 鞍・四緒手とも書く。
  15. 「手明衆は特に役のない者、無役の者」のことである(佐藤2010)。
  16. 韓国国立中央博物館は《平壤城攻防図屏風》の他にこれと酷似した八曲一隻の屏風《平壤城奪還圖》(97cm×40cm)を所蔵している。ここに描かれている鞍の前輪はほとんどがIa類である(한국국립중앙박물관2007)。
  17. 前輪の形態は細部までは判別できなかったため細分(a～c)はせず、大分類(I～IV)に留めた。また、III類は確認できなかったため表には掲載していない。
  18. 松浦史料博物館の久家孝史氏から複写の提供を受けた。

## 引用・参考文献

- 太田秀春 2005 『朝鮮の役と日朝城郭史の研究—異文化の遭遇・受容・変容—』清文堂出版 p.124
- 大槻文彦 1912 「金城秘疆補遺」(『磐水存響』乾所収 1914) pp.343～432
- 菊田定郷 1933 『東北遺物展覧会記念帖』東北遺物展覧会 100図, p.22
- 神吉敬三 1989 「イベリア系聖画国内遺品に見る地方様式」『美術史』126号 美術史學會 pp.151～172
- 五野井隆史 2003 『支倉常長』吉川弘文館 pp.19～20
- 小山弓弦葉 2014 「134 刺繡九羊啓泰図軸」『台北國立故宮博物院 神品至宝』NHK, NHKプロモーション, 読売新聞社, 産経新聞社, フジテレビジョン, 朝日新聞社, 毎日新聞社 p.356
- 佐賀県立名護屋城博物館編 2007 『秀吉と文禄・慶長の役』佐賀県芸術文化育成基金 p.85, 93
- 佐々木和博 2013 『慶長遣欧使節の考古学的研究』六一書房 pp.91～114, 136～186, 210～215
- 佐々木和博 2016 「国宝『慶長遣欧使節関係資料』におけるカズラの基礎的考察」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第48号 東北学院大学東北文化研究所 pp.1～22
- 佐々木和博 2017 「国宝『慶長遣欧使節関係資料』におけるプラケット残欠の基礎的考察」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第49号 東北学院大学東北文化研究所 pp.43～62
- 佐藤憲一 2010 「大使, 支倉常長について」『仙台市史』

- 特別編 8 仙台市 pp.553~562
- 佐藤雅彦 1981 「208 青花玉取獅子文八角瓶」『世界陶磁全集』13 小学館 p.318
- 参謀本部編 1924 『日本戦史・朝鮮役（本編・附記）』偕行社 pp.255~270
- ジャン＝ポール・デロッシュ 1999 「サントス宮殿『磁器の間』」『世界美術大全集・東洋編』第8巻・明 小学館 pp.345~350
- 辛基秀・仲尾宏編 1996 『大系朝鮮通信使』第1巻 明石書店 pp.18~21
- 菅谷成子 2006 「スペイン領フィリピンにおける『中国人』—“Sangley” “Mestizo” および “Indio” のあいだ—」『東南アジア研究』43巻4号 京都大学東南アジア研究所 pp.374~396
- 鈴木敬三 1985 「しおで 四緒手」『国史大辞典』第6巻 吉川弘文館 p.656
- 須田牧子 2012 「『倭寇図巻』再考」『東京大学史料編纂所研究紀要』第22号 東京大学史料編纂所 pp.191~199
- ダイヤグラム・グループ編（田島優・北村孝一訳）1982 『歴史、形、用法、威力 武器』マール社 pp.94
- 陳殿 2017 「明・清時代の景德鎮混水技法の変化規則」『中近世陶磁器の考古学』第6巻 雄山閣 pp.75~89
- 馬雅貞（植松瑞希訳）2013 「戦勲と宦蹟—明代の戦争図像と官員の視覚文化—」『東京大学史料編纂所研究紀要』第23号 東京大学史料編纂所 pp.316~347
- 三杉隆敏・榎原昭二 1989 『陶磁器染付文様事典』柏書房 p.137, 229
- モルガ, アントニオ・デ 1609（神吉敬三・箭内健次郎訳1966）『フィリピン諸島誌』岩波書店 pp.392~394
- 1974 『和刻本明清資料集』第4集 汲古書院
- 鄭振鐸編 1988 『中國古代版畫叢刊』（三）新華書店 上海發行所
- 上海古籍出版社編 1994 『中國古代版畫叢刊二編』第二輯~第七輯 新華書店上海發行所
- 周芑編 1988 『中国版画史图录』（上下册）新華書店 上海發行所
- 周蕪編著 1993 『金陵古版畫』江蘇省新華書店

- 林莉娜 1993 「明人『出警入蹕圖』之綜合研究（上）」『故宮文物月刊』127号國立故宮博物院 pp.58~77
- 林莉娜 1993 「明人『出警入蹕圖』之綜合研究（下）」『故宮文物月刊』128号國立故宮博物院 pp.34~41
- 劉永華 2002 『中國古代車輿馬具』上海辭書出版社 p.180
- 王度 2007 『御馬金鞍—王度歷代馬鞍馬具珍藏展—』中華文物保護協會 p.96,100
- 吳连城 1988 『宝宁寺明代水陆画』文物出版社 pp.1~7
- 閻景全 1990 「黒龍江省阿城市双城村金墓群出土文物整理報告」『北方文物』总第22期 北方文物杂志社 pp.28~41
- 朱鴻 2004 「『明人出警入蹕圖』本事之研究」『故宮學術季刊』第22卷第1期 國立故宮博物院 pp.183~213
- LaRocca, Donald J., 2006 *Warriors of Himalayas: Rediscovering the Arm and Armor of Tibet.* pp.214~215 The Metropolitan Museum of Art.
- Na Chih-Liang 1970 'A DESCRIPTIVE STUDY OF THE EVENTS OF THE SCROLLS.' *THE EMPEROR'S PROCESSION: TWO SCROLLS OF THE MING DYNASTY.* pp.125~137 The National Palace Museum
- 한국국립중앙박물관2007『하늘이 내린 재상, 류성룡』 한국국립중앙박물관 pp.110~111

#### 掲載写真の所蔵者・所蔵機関

- 第1図, 第2図: 仙台市博物館
- 第6図, 第10図: 北京故宮博物院
- 第7図: 東京大学史料編纂所
- 第8図, 第12図1~4: 台北国立故宮博物院
- 第11図1: 中国国家博物館
- 第11図2: リスボン, サントス宮殿
- 第11図3: イラン, バスタン博物館
- 第12図5: 中国, 宝寧寺
- 第13図1, 2: 赤堀和
- 第13図3: 王度
- 第15図: 韓国国立中央博物館
- 第16図: 松浦史料博物館